尾道市持光寺所蔵釈迦八相図について（二）

関口正之

二　主題（承前）

美術研究三一七号に収めた「尾道市持光寺所蔵釈迦八相図について（一）」においては、釈迦八相図八幅の主題について第一幅から第三幅について述べた。本稿では、それに続く第四幅と第五幅の主題について記す。

（四）第四幅

「第四」と記される一幅は、左下隅に舞楽の大太鼓を描いて宮殿の一部をのぞかせる以外は、画面の大半は険しい山中の景を表し、その中に迦毘羅城を抜け出した後の太子の姿を中心に十個の説話を点在させる。画面左上は頭髪を落してしまう太子を描き、その右に、太子が自分の髻を切り自分の衣服や瓔珞をはずして車匿に与える「車匿・犍陟との別れ」を描く。白馬が傍に崩れるように坐るのでそれと判るが、車匿の外にもう一人の人物が描かれる例は本図以外にはない。また、太子が両手で頭髪に触れる姿勢をしていることは、常楽寺本にも描かれる。太子のそばに車匿と白馬がいるので車匿との別れを表したものにちがいない。『過去現在因果経』と『方広大荘厳経』には、太子は宝冠をとり髻中の明珠を車匿に与えたと記されている（資料一一）から、この表現はこの場面を描こうとしたものと考えられる。また、太子が僧形の人物に剃髪してもらう光景が、その左側に描かれるが、この場面を絵画化した例は、持光寺本以外には知られていない。しかし、早い時期に漢訳された『修行本起経』では、帝釈天が剃髪の刀を持って現れたと説き、隋訳の『仏本行集経』には、浄居天が「浄髪師」の姿で現れて剃髪したと記されている。また呉の支謙訳『瑞応本起経』では「天神」が、西晋竺法護訳『普曜経』では「飛天」が刀を捧げて来たとあるが、記述が簡潔すぎて天神と飛天が太子の前に姿を現したか否かは判然としない。従って、本図の表現は持光寺本にのみ認められるにすぎないが、経典の文章を見る限りでは、太子を剃髪する人物を絵画化したことが筆者の創造であるとは断定できない。上記以外の諸経には、太子が車匿や白馬犍陟と別れるときに自らの手で髪も剃ったように記述されている（資料一二）。

次に、右側の絹継ぎの中央より少し下に、弓矢を持つ人物に会う太子を描く。これと似た場面は、根津美術館本に表されている。これは、出家を決意した太子が自分の著衣が出家する身にはふさわしくないことをさとり、山中で出会った猟師の衣服と取替えるところを描いたと考えられる。諸経のうち『修行本起経』・『瑞応本起経』・『普曜経』・『異出菩薩本起経』では、太子は猟師が着ていた「鹿皮」の衣と自分の衣とを交換したと記すが、『仏所行讃』・『過去現在因果経』・『仏本行集経』・『方広大荘厳経』には、浄居天が猟師の姿に化身し、しかも、袈裟を身にまとうという異様な姿で登場し、太子と衣服を交換した猟師は本身に復して太子の服を持って天に昇ることが説かれる。宋代になって漢訳された『衆許摩訶帝経』・『仏本行経』では、猟師の姿に変身したのは浄居天ではなく帝釈天となっている（資料一三）。根津美術館本には、服を掛けた弓を肩にかついで白雲とともに天に昇る浄居天（或は帝釈天）の姿を描く。持光寺本の右側絹継ぎ上部近くには、布状のものを掛けた竿を肩にして白雲の中から上を見上げる人物の姿が、崖の背後から半身をのぞかせている。その人物が見上げる上方には白雲が天に昇るように表わされるので、これは根津美術館本と同じ情景を描いたもの推定することができる。

画面中央の下辺に描かれる山道には、首うなだれて坂道を下りて来た白馬と二人の人物が見える。これを見ても本図には、車匿との別れの場面において、車匿の外にもう一人の人物が「出家踰城」（出城）のときに太子に付き随ったと解釈していたことがうかがえる。

さらに画面中央上方には、岩窟の中にいる老人の前に左膝をついて跪坐する、太子と思われる人物が描かれる。この場面は、山中に入った太子が、阿羅邏仙人などを訪ねて生・老・病・死の苦悩を解く道を尋ねる「山中訪仙」を表わしたものと考えられる。

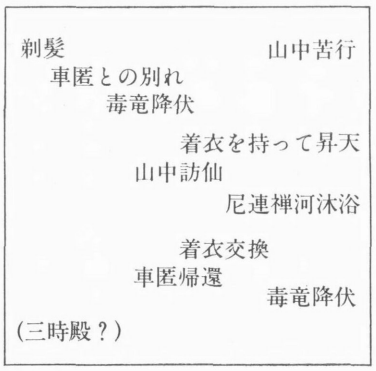
この場面の右方には、前述した浄居天が帰天するところが表されており、更にその右には、河岸の樹の枝に姿を現す天人の手に助けられて、河から岸に上ろうとする人物の後姿が描かれる。根津美術館本にも同様に表された場面が見られる。これは、六年間の苦行が無益だと悟った太子が、菩提樹下で最後の思惟を始めるために尼連禅河で身体を潔めたとき、激しい苦行のために体力が衰えていた太子が独力では岸に上れないでいるのを見た樹神（或は天神）が、樹の枝を曲げて太子の方に差し出して太子を助け上げた光景を表現しているものと考えられる。

画面右上隅には、菩提樹の下の金剛座の上に、供養をうけた吉祥草を敷いて坐り、思惟を続ける太子の姿を描く。残る二つの場面は、画面中央上部に、竜と向い合う太子を描くものと、画面右下隅に、竜を鉢の中に納めた太子を礼拝する二人の人物を描くものである。久遠寺本の中にも、これと同じ場面が、画面の左右の端に、本図と同様に離されて描かれている。この場面は、太子が降魔成道の後に三迦葉を教化したことを表していると考えられるので、本図においては、仏伝において降魔成道の後に起る説話が、降魔より以前の場面にまじって表現されていることがわかる。このことは、第二幅・第三幅における四門出遊と試芸の場面が、仏伝の時間的順序では逆であるにもかかわらず描かれることとともに本図の特色の一つと考えねばならぬ点であろう。

画面左下には舞楽の大太鼓の陰に楽器を手にした二人の婦人が描かれる。根津美術館本でも画面左下に同種の表現が見られるが、根津本では

楽人の数が多く描かれている。ここは根津本では、太子の出家を思いとどまらせようとして父浄飯王が建てた三時殿での娯楽の様子を表現したとも考えられるが、本図では、広々とした建物の中に人影が見られぬこととといい、楽人の数が少いことを考えれば、主人である太子が去ったために悲しみに沈む三時殿を、山中における太子の行動に対比させて描き添えたものであろう。従って、本図は、出家して山中で修行を開始した太子の姿中心に描いた一幅である。

挿図1　釈迦八相図略図



第四幅

第五幅

（五）　第五幅

「第五」と記された一幅は、画面の向って左下隅の八人の人物と、向って右下隅の八人の人物とを向い合わせ、その間に数個の場面を配置させる。上部左右には急峻な峯が重なる山塊を描き、画面中央を淡い槍霞で区切る。槍霞の上方には、向って左から、逃げる鬼を戟を構えて突こうとする神将、白牛の背中に噛みつく唐獅子、竜を押さえてついばむ金翅鳥の三組の格闘の有様を並べて表現し、画面下辺には、向って左から、岩に向って拳をふるう力士、水流の岸から水を飲む白象、風に吹き倒されそうに傾く大樹を描き、大樹の下辺には、強風で台座から落とされそうになり驚く人々を添える。これら六つの場面の組合せから判断して、本図は牢度叉闘聖変相を描いたものであることは明らかである。釈迦八相図の中に、この主題を描き加えた例は非常に少く、僅かに滋賀県常楽寺蔵釈迦八相図が一例だけ紹介されているにすぎない。[1] 常楽寺本では一幅の画面の中に降魔の場面と牢度叉闘聖変相が併せ描かれているのに対し、持光寺本では牢度叉闘聖変相の主題が重視されて、一幅の画面（第五幅）を独占していることは持光寺本にのみ見られる特色であり、釈迦八相に対する作者の姿勢を反映するものである。

持光寺本第五幅のような光景を表現した図が『図画見聞誌』巻第三・第六に記される「牢度叉闘聖変相」に相当するものであることは、松本栄一博士が今から五十年も前に、敦煌莫高窟などの壁画の主題を研究されたときに既に指摘しておられる。[2] 牢度叉闘聖変相は、祇園精舎建立に際し、それを快く思わなかった外道が、釈迦の弟子に法力競べを挑んだが負かされてしまう説話を描いたものである。松本博士は、その論考の中で、牢度叉闘聖変相に関する基本的な出典が『賢愚経』巻第十、『衆許摩訶帝経』巻第十二（以下『摩訶帝経』と略称する）、『根本説一切有部毘奈耶破僧事』巻第八（以下、『有部破僧事』と略称する）、『西域記』巻第六であること、術競べの試合は『賢愚経』のみが詳しく、六試合を述べているが、『摩訶帝経』と『有部破僧事』は四試合しか記していないこと、敦煌壁画の表現を見ると『賢愚経』より更に詳説された内容の経典に基づいて牢度叉闘聖変相が絵画化されたと想像されることなどを述べておられる。持光寺本の第五幅に描かれた法力競べは、『賢愚経』に見られ

るのと同じ六試合であるので、本稿では、牢度叉変相については最も詳しく記している『賢愚経』の記述の順に従い、持光寺本の表現を検討する（資料一八）。

釈尊のために精舎（祇園精舎）が造営されることを反対した外道が、術競べを提案して自らの代表として選んだ者が牢度叉である。『図画見聞誌』に見える「牢度叉」は、『賢愚経』では「労度差」と訳している。牢度叉の名が現れるのは『賢愚経』のみであり、『摩訶帝経』と『有部破僧事』は「赤眼」と訳している。牢度叉に対する釈尊の側の代表は舎利弗である。法力競べの試合は、牢度叉の先攻で開始された。

最初、牢度叉は花をつけた一本の大樹を出現させるが、舎利弗は根こそぎ倒してしまい舎利弗の勝となった。樹木については、いずれも「花樹」（摩訶帝経）、「大菴没羅樹」（有部破僧事）、「一樹……枝葉欝茂。花果各異」（賢愚経）とあり、花が咲いた大樹であると記されるが、舎利弗がその大樹を倒したことは、『摩訶帝経』が「微少風」によると記すのに対し、『有部破僧事』と『賢愚経』はそれぞれ「大風雨」と「嵐風」を吹かせて「摧樹抜根」、「吹抜樹根」であったことを述べている。本図（第五幅）の下段中央に、根を露わにして向って右方に横倒しになる一本の樹木を描くが、枝や葉が激しく風にあおられる様子や、画面の右下辺の人物も風に飛ばされそうに表されている姿によって、本図の樹木が牢度叉と舎利弗の最初の法力競べを表現したものであることが知られる。

次に、牢度叉は花が咲く池を出現させた。これに対し舎利弗は、象を出現させて池を蹂躙してしまった。前述の三つの経典には、いずれも牢度叉が池を出現させたと記され、『賢愚経』には「池水之中。生種種華」とあり、『有部破僧事』には「蓮花大池」、『摩訶帝経』には「蓮花遍発人讃異常」とあって蓮花やその他の花が生い繁った池であるように記されている。しかし、本図には花が咲く池はなく、画面の下段中央に川の水を飲む白象が描かれる。第五幅の中にはその他に象を表していないので、この部分が二番目の試合を意味していると見なしてよいであろう。なお、常楽寺本における牢度叉の第二試合は、本図と同様に川の流れから水を飲む白象が描かれている。上述の三つの経典では明らかに「池」が登場するのに対し、持光寺本も常楽寺本も一条の水流を表現していることは、両者の表現の祖本となった作品が存在したと推測できる。

二度続けて敗れた牢度叉は、続いて山を出現させるが、舎利弗は今度は金剛力士を現し金剛杵を振るわせて跡形もなく山を砕いてしまった。山と金剛力士の話は『賢愚経』にだけ記され、他の二経には説かれていない。本図では、画面の向って左下、白象の左に並べて描かれる。右手を振上げる金剛力士の前に、既に打ち砕かれて小さくなったことを表現させたと解釈してよいであろうが、身の丈より少し小さい岩が描かれている。本図と同じ形式の金剛力士と岩は、常楽寺本の中にも見ることができる。以上の三つの法術競べは、画面の向って右から順に、画面下段に並列させていることがわかる。

牢度叉は更に竜を出現させる。『摩訶帝経』と『有部破僧事』では、竜を「七首」、「七頭竜王」と記すが、『賢愚経』は「十頭」の竜であると述べる。これに対し舎利弗は、竜を食べる金翅鳥を現して竜に襲いかからせ、この術くらべも舎利弗の勝となる。本図では画面上段中央に竜の

背を押さえつけて食いつく金翅鳥を描く。常楽寺本では、単に竜の背に止まる金翅鳥を描くだけであるのに対し、本図には竜を攻撃する金翅鳥の激しい勢いが表現されている。しかし、三つの経典では竜と金翅鳥が闘う様子は具体的に記されていない。この点は、持光寺本の作者が独自に表現を工夫していることを示すものであろう。

更に、牢度叉は牛を出現させる。それに対して舎利弗は、獅子を出現させて牛を襲う。本図ではそれは、画面の上段左方、即ち金翅鳥と竜の向って左隣りに描かれており、右方に逃げる白い牛の背に獅子が喰みついている。常楽寺本では、前足を曲げて地に坐る牛の背に噛みつこうとする獅子が描かれており、本図のような動きは表されていない。なお、この術競べは『賢愚経』にのみ記されており、『摩訶帝経』にも『有部破僧事』にも説かれていないものである。

最後の試合は、『賢愚経』によれば、牢度叉は「夜叉鬼」に変身するが舎利弗もみずから「毘沙門王」に変身して夜叉を屈伏させたことが見える。しかし、『摩訶帝経』と『有部破僧事』においては、牢度叉は「羅刹」・「起屍鬼」に変身したと説いているから、『賢愚経』の「夜叉鬼」と同様に鬼類に変じているのであるが、舎利弗の方は毘沙門王にはならず「呪」を唱えた。そして、呪に苦しんだ「羅刹」・「起屍鬼」は、逆に外道に怒りを向けたので、外道は舎利弗に救いを求めたと記されている。本図には、画面上段の向って左端に、右へ逃げる鬼を戟を突き出しながら追いかける神将形が表されている。以上の六つの試合の外には術競べを推測させる光景は本図に描かれていないので、この場合が『賢愚経』に説く牢度叉と舎利弗の第六番目の試合を表したものと考えてよいであろう。常楽寺本にも毘沙門と夜叉が描かれるが、その表現に本図のような動きはなく、邪鬼を踏んで立つ四天王彫像における毘沙門天像を写したと言える姿に表されている。

本図に描かれた六つの術競べと、『摩訶帝経』以下三点の経典の記述とを比較すると、六つの術競べを収録しているのが『賢愚経』だけであることによっても、本図の表現と『賢愚経』の記述が関連があることは明らかである。また、『摩訶帝経』・『有部破僧事』にも記載される四つの術競べの記述と本図を比較しても、本図は『賢愚経』にのみ見える毘沙門天を描いている点で『賢愚経』の系統に基いた牢度叉闘聖変相であると推定できる。従って、画面の下段左右端で向い合う二組の人々は、牢度叉を含む外道の一群と舎利弗と須達長者達と見なすことができよう。六つの試合を描く表現をみると、大樹は向って右に倒れ、残る五つの試合では、舎利弗が出現させたり或いは変身した白象・金剛力士・金翅鳥・獅子・毘沙門天が、向って左側に位置して、向って右方に向う姿勢に描かれている。更に、牢度叉が出現させ或いは変身した池・山・鬼は向って右側に位置し、牛や鬼は向って右方に逃げ出している。このような特色を考えると、画面の左下側の人物が舎利弗の側の人々、画面の右下の人々が牢度叉達を意味するものと考えられる。牢度叉達の外道は、第一試合の大風にあおられるかのように、倒れ来る大樹のもとで座を乱して逃げ惑う姿に表現されている。画面上方には、鋭くそびえる山の峯と、湧きあがる雲が遠景として添えられている。

（未完）

註

（1）梅津次郎「降魔図（釈迦八相図七幅の内）」国華760、昭和30年7月。

（2）松本栄一「敦煌地方に流行せし牢度叉闘聖変相」仏教美術19、昭和8年。

〔資料〕　―二―（美術研究317号32頁下段につづく）

持光寺蔵釈迦八相図に描かれた個々の場面について、諸経典の記述は如何に表現しているかを絵画と比較するために、大正新修大蔵経第三・四・二十四巻（本縁部上下）に納まる経典から次の十二種を選び、主題ごとに列記する。経典名は、上に付した数字を以って表し、末尾に記す「3―463中」は、大正蔵経の第3巻463頁中段に、その項が存在することを示す。なお、引用文の中の現在使われていない文字については、当用漢字で代用したものがある。

1　後漢・竺大力共康孟詳訳『修行本起経』二巻
2　呉・支謙訳『仏説太子瑞応本起経』二巻
3　西晋・竺法護訳『仏説普曜経』八巻
4　西晋・聶道真訳『異出菩薩本起経』一巻
5　北涼・曇無讖訳『仏所行讃』五巻
6　劉宋・求那跋陀羅訳『過去現在因果経』四巻
7　隋・闍那崛多訳『仏本行集経』六十巻
8　唐・地婆訶羅訳『方広大荘厳経』十二巻
9　宋・法賢訳『仏説衆許摩訶帝経』十三巻
10　宋・釈宝雲訳『仏本行経』七巻
11　唐・義浄訳『説一切有部毘奈耶破僧事』二十四巻
12　元魏・慧覚等訳『賢愚経』十三巻

一一　車匿訣別

1　巻下・出家品第五「太子下馬。解身宝衣纓絡宝冠。尽与闡特。告言汝便牽馬帰。……。於是闡特。悲泣礼足。牽馬辞還。」（3―468上）

2　巻上「遣車匿還。車匿長跪曰。今随大天。不可独還。太子曰。汝可径帰。上白大王。及謝舎妻。今求無為大道。勿以我為憂。即脱宝冠及著身衣。悉付車匿。於是白馬。屈膝舐足。涙如連珠。車匿悲泣。随路而啼。」（3―476上）

3　巻第四・告車匿被馬品第十三「菩薩脱身宝瓔奇珍以付車匿。持是還国。啓白父王及以舎妻。……。」（3―508上）

4　「謂車匿。若従是而還。車匿言。我随大天。不可還。太子曰。帰謝大王及我舎妻言。我欲入山為道。終身不復還。太子取頭上宝冠無利著身珍衣。授与車匿。車匿啼哭受之。其白馬。前屈膝垂涙。而舐太子足。」（3―619下）

5　巻第二・車匿還品第六「汝事我已畢　今且乗馬還　……　即脱宝瓔珞　以授於車匿　具持是賜」（4―11上）

6　巻二「汝便可与捷陟俱還宮也。爾時車匿聞此語已。悲号啼泣。迷悶于地。不能自勝。於是捷陟。既聞被遣。屈膝舐足。涙落如雨。……。于時太子。即就車匿。取七宝剣。……。便脱宝冠髻中明珠。以与車匿而語之曰。以此宝冠及以明珠。致王足下。……。太子又復脱身瓔珞。以授車匿而語之曰。」（3―633中下）

7　巻第十八・剃髪染衣品第二十二下「爾時太子以手従其天冠頭髻解天無価摩尼之宝。付与車匿。……。是時車匿。従地起已。馬王乾陟。前膝胡跪。出舌舐於太子二足。両眼流涙。」（3―735上～736下）

8　巻第六・出家品第十五「汝便可将乾陟俱還。即自解髻取摩尼宝以付車匿告言。……。於是車匿。従地而起挙声大哭。乾陟低頭前屈双脚。舐菩薩足涙下悲鳴。」（3―576上中）

9　巻第五「脱宝冠上妙衣服。告滄那曰。将我衣服及彼馬王帰奉父王。……。」（3―947上）

10　巻第二・車匿品第十二「解宝瓔珞付車匿……馬聞太子語　目即雨熱涙　跪地暢悲鳴　便跪舌舐足」（4―69上、70上）

一二　山中剃髪

1　巻下・出家品第五「思欲剃頭髪。倉卒無有具。帝釈持刀来。天神受髪去。」（3―468中）

2　巻上「当作沙門。如菩薩法。天神奉剃刀鬚髪自堕。天受而去。」（3―476下）

3　巻第四・告車匿被馬品第十三「欲作沙門。……。天王知心。飛天奉刀来。帝釈受髪則成沙門。」（3―509中）

5　巻第二・車匿還品第六「衆宝荘厳剣　車匿常執随　太子抜利剣　如竜曜光明　宝冠籠玄髪　合剃置空中　……忉利諸天下　執髪還天宮」（4―12上）

6　巻第二「便以利剣。自剃鬚髪。……。釈提桓因。接髪而去。」（3―634上）

7　巻第十八・剃髪染衣品第二十二下「爾時太子。従車匿辺。索取摩尼雑飾荘厳七宝把刀。自以右手。執於彼刀。従鞘抜出。即以左手。攬捉紺青優鉢羅色螺髻之髪。右手自持利刀割取。以左手擎。擲置空中。時天帝釈。以希有心。生大歓喜。捧太子髻。不令堕地。以天妙衣承受接取。……。爾時浄居天大衆。去於太子。不近不遠。有一華鬘。名須曼那。其須曼那華。不化作一浄髪師。執利剃刀。去於太子不遠而立。太子見已。作如是言。謂浄髪師。汝能為我浄髪以不。其浄髪師報太子言。我甚能為。……。爾時彼化浄髪之師。即以利刀。剃於太子無見頂相紺螺髻髪。当剃頭時。帝釈天王。生希有心所落之髪。不令一毛墜堕於地。一一悉以天衣承之。受已将向三十三天。而供養之。」（3—737下）

8　巻第六・出家品第十五「菩薩作是思惟。若不剃除鬚髪非出家法。乃従車匿取摩尼剣即自剃髪。既剃髪已擲置空中。時天帝釈見希有事。心大歓喜。即以天衣於空承取。還三十三天礼事供養。」（3—576下）

9　巻第五「挙手執剣如優鉢羅花葉。即自截髪擲虚空中。天主帝釈運大神力以手接髪。与諸天子安忉利天如法供養。」（3—947上）

一三　著衣交換

1　巻下・出家品第五「即便見猟師駈遊被法衣。太子喜念言。此則真人衣。度世慈悲服。猟者何故著。便持金鏤衣。貿所震越。」（3—469上中）

2　巻上「逢両猟客。太子自念。我已棄家。在此山沢。不宜如凡人被服宝衣有欲態也。乃脱身宝裘。与猟者貿鹿皮衣。」（3—475下）

3　巻第四・告車匿被馬品第十三「遂進前行逢両猟師。心自念之。吾已出家不与俗同。脱身所服貿鹿皮衣。著之而去。」（3—508中）

4　「道逢猟者。太子曰。我欲従卿有所債。寧可得耶猟者言。所索者可得。太子曰。欲得君鹿皮。猟者即以皮与太子。太子亦以珍物与之。」（3—619下）

5　巻第二・車匿還品第六「時浄居天子　知太子心念　化為猟師像　持弓佩利箭
身被袈裟衣　径至太子前　太子念此衣　染色清浄服　仙人上標飾　猟者非所応
即呼猟師前　軟語而告曰　汝於此衣服　貧愛似不深　以我身上服　与汝相貿易
猟師白太子　非不惜此衣　用謀諸群鹿　誘之令見趣　苟是汝所須　今当与交易
猟者既貿衣　還自復天身」（4—12上中）

6　巻第二「時浄居天。於太子前。化作猟師。身被袈裟。……。即脱宝衣而与猟者。自被袈裟。依過去諸仏所服之法。時浄居天。還復梵身。上升虚空。帰其所止。」（3—634上中）

7　巻第十八・剃髪染品第二十二下「時浄居天。……。応時化作猟師之形。身著袈裟染色之衣。手執弓箭。……。従菩薩迦尸迦衣。……。菩薩爾時。……。即脱身上迦尸迦衣。与彼猟師。……。以神通飛上虚空中。」（3—738上）

8　巻第六・出家品第十五「時浄居天化作作猟師。身著袈裟手持弓箭。……。即取袈裟授与菩薩。……。即便与彼憍奢耶衣。時浄居天以神通力。忽復本形飛上虚空。」（3—576下）

9　巻第五「時帝釈知是事已。自変其身為一猟師。手携弓剣披此袈裟。見太子来坐於路傍。太子問曰。汝是猟師。云何身上有此憍尸迦衣細妙法服。可以与我。猟人告言。唯此袈裟我非愛楽。今欲与汝是服微妙。……菩薩告言。一切世間知我威力。汝但施服勿懐憂慮。帝釈天主即復本形頭面礼足。」（3—947中下）

10　巻第二・瓶沙問事品第十三「忽見釈化作　猟師被袈裟　太子因語曰　此服非汝宜　取吾金綵衣　卿袈裟与我　猟師尋便与　木蘭真袈裟　受衣還釈形　忽然昇虚逝」（4—70中）

一四　車匿帰還

1　巻下・出家品第五「於是闐特。悲泣礼足。牽馬辞還。未至国城。四十里外。白馬悲鳴。其声徹国中。」（3—468上）

2　巻上「車匿歩牽馬還。宮都中外。莫不惆悵。」（3—476上）

3　巻第四・告車匿被馬品第十三「車匿取衣及宝瓔珞。牽白馬還。」（3—508中）

4　「車匿歩牽馬而還。車匿亦啼。白馬亦啼。従後望太子。取麝鹿皮著之。」（3—619下）

5　巻第二「挙首仰呼天迷悶而躄地　起抱白馬頸　望絶随路帰　徘徊屢反顧　……　或俯仰垂身　或倒而復起　悲泣随路還」（4—12中）

6　巻第二「顧看犍陟及荘厳具。鳴咽悲哽。涕泗交流。即牽犍陟。執持宝冠厳身之具。車匿号咷。犍陟悲鳴。縁路而帰。」（3—634中）

7　巻第十八・車匿等還品第二十三上「将馬乾陟。辞別太子。廻還帰至加毘羅

城。」（3—738中）

8　巻第六・出家品第十五「牽彼乾陟悲哀而返。……。於是車匿既辞別已。遙望菩薩頭無天冠身無瓔珞種々宝服一切都無。」（3—576下～577上）

9　巻第五「令彼飡那帰迦毘羅城」（3—947中）

10　巻第二・車匿品第十二「車匿啼且還　順道而牽馬　顧視而無厭　蹋地強還帰」（4—70中）

一五　山中訪仙

1　巻下「諸道士。一名為阿蘭。二名為迦虜。……。善来悉達便坐是榻。」（3—469中）

2　巻上「見三梵志。各与弟子。索居谿辺。過問其道。」（3—476下）

3　巻第五・異学三部品第十四「菩薩遙見欝頭藍弗。為諸弟子所見奉敬。……。往詣其所問曰。……。」（3—510中）

5　巻第三・阿羅藍欝頭藍品第十二「爾時阿羅藍　聞太子所問……」（4—22中）

巻第三・同「往詣欝陀仙　……　復捨欝陀仙」（4—24上中）

6　巻第二「太子既見如此苦行。即便問於跋伽仙人。……。」（3—634中下）

巻第三「詣彼仙人阿羅邏迦蘭。……。」（3—636中下）

7　巻第二十一・問阿羅邏品第二十六上—巻第二十二・同品下（3—751下～757中）

8　巻第七・頻婆娑羅王勧受俗利品第十六「城傍有仙。名阿羅邏。……。問阿羅邏曰。……。」（3—578下）

9　巻第六「爾時菩薩即阿羅拏迦羅摩処而学道法。……。」（3—948中）

10　巻第三・不然阿蘭品第十五「詣阿蘭問　生死出要　……」（4—74中）

一六　尼連禅河沐浴

1　巻下・出家品第五「菩薩意念。欲先沐浴然後受糜。行詣流水側。洗浴身形。浴訖欲出水。天神按樹枝。二女奉乳糜。得色気力充。」（3—470上）

2　巻下「仏初得道。自知食少身体虚軽。徐起入水洗浴。畢欲上岸。天按樹枝。得攀而出。旋往樹下。有五百青雀。飛来繞仏。」（3—479上）

3　巻第五・六年勤苦行品第十五「入水而自洗浴。時八万天子各按樹枝供養菩薩。菩薩牽枝出在岸辺。其身軽便清浄無垢。菩薩適住。」（3—512上）

5　巻第三・阿羅藍欝頭藍品第十二「澡浴尼連浜　浴已欲出池　羸劣莫能起　天神按樹枝　挙手攀而出」（4—24下）

6　巻第三「即従坐起。至尼連禅河。入水洗浴。洗浴既畢。身体羸瘠。不能自出天神来下。為按樹枝。得攀出池。」（3—639中）

7　巻第二十五・向菩提樹品第三十上「爾時菩薩。……。安詳漸至尼連河岸。……。脱衣入彼河中。澡浴除身熱気。……。於彼水中。既澡浴已。取其袈裟。於水中濯出捩曬乾。著於体上。欲渡彼水。波流遄疾。身体尪羸。不能得越。兼復六年勤苦行。身力劣弱。不能得済彼河之岸。爾時彼河有一大樹名頻誰那。彼樹之神。名柯倶婆住依彼樹。時彼樹神。以諸瓔珞荘厳之臂。引向菩薩是時菩薩。執樹神手。得渡彼河。」（3—772上）

8　巻第七・往尼連河品第十八「往詣尼連河　……　菩薩入河浴　諸天散香花将欲昇河岸　神来低宝樹」（3—584上）

9　巻第六「爾時菩薩浴尼連河水。体羸力弱挙歩攸難。岸樹垂枝攀而得出。」（3—949中）

一七　菩提樹下

1　巻下・出家品第五「望見叢林山。其地平正。四望清浄。生草柔軟。甘泉盈流。花香茂潔。中有一樹。高雅奇特。枝枝相次。葉葉相加。花色蓊欝。如天荘飾。天幡在樹頂。是則為元吉。衆樹林中王。……。於是菩薩。安坐入定。」（3—470上中）

2　巻下「旋往樹下。」（3—479上）

3　巻第五・六年勤苦行品第十五「於是菩薩飯食已充。……。欲坐樹下現成仏道度脱衆生。」（3—512下）

4　「太子遂入深山無人之処。取地高草。於樹下正坐。一心自念言。今日飢骨筋髓。皆枯腐。於此不得仏不起。」（3—620上）

5　巻第三・阿羅藍欝頭藍品第十二「菩薩一人遊行　詣彼吉祥樹　……　従彼穫草人　得浄柔軟草　布施於樹下　正身而安坐　加趺不傾動」（4—24下～25上）

6　巻第三「趣畢波羅樹。自発願言。坐彼樹下。我道不成。要終不起。……。即便自知以草為座。釈提桓因。化為凡人。執浄軟草。菩薩問言。汝名何等。答名

吉祥。……。菩薩又言。汝手中草。此可得不。於是吉祥。即便授草。……。菩薩受已。敷以為座。而於草上。結跏趺坐。」（3—637中下）

7　巻第二十七・向菩提樹品第三十下「爾時菩薩。所鋪之草。其根向内。頭皆向外。鋪已右遶彼菩提樹三匝訖竟。加趺而坐。」（3—778中）

8　巻第八・詣菩提場品第十九「爾時菩薩示現取草周遍敷設如師子王。……。将証菩提而面向東於浮草上結加趺坐。」（3—588上）

9　巻六「爾時菩薩欲至金剛座。……。……菩薩思念。以吉祥草鋪金剛座。天主帝釈即時化身。往香酔山取吉祥草。其草柔軟如兜羅綿。詣菩提樹前陳金剛座上爾時菩薩挙相好身。登金剛座結跏趺坐。」（3—950上）

10　巻第三・不然阿蘭品第十五「遙見好樹　……　吉祥持草　……　即便従之受柔軟草　散金剛座草　皆斉整　跏趺結坐」（4—75下）

一八　牢度叉闘聖変相

a　樹

9　巻第十二「赤眼婆羅門化作花樹。如実芳葩豔治動衆。尊者神力出微少風。其化根苗吹散異処。」（3—968上）

11　巻第八「化作大菴没羅樹。開花結実。具寿舎利弗。為大風雨摧樹抜根。須臾散滅。」（24—140下）

12　巻第十・須達起精舎品第四十一「六師衆中。有一弟子。名労度差。善知幻術。於大衆前。呪作一樹。自然長大。蔭覆衆会。枝葉欝茂。花果各異。……。時舎利弗。便以神力。作旋嵐風。吹抜樹根。倒著於地。砕為微塵。」（4—402）中

b　池

9　巻第十二「又化一池水満澄湛。蓮花遍発人讃異常。尊者化出大象膚体端正。入池蹂践須臾狼籍。」（3—968上）

11　巻第八「外道又化作一蓮花大池。具寿舎利弗。化為象子践池折花。尋復平地。」（24—140下）

12　巻第十・須達起精舎品第四十一「今労度差。便為不如。又復呪作一池。其池四面。皆以七宝。池水之中。生種種華。……。時舎利弗。化作一大六牙白象。其一牙上。有七蓮花。一一花上。有七玉女。其象徐詳。往詣池辺。并含其水。池即時滅。」（4—420中）

c　山

12　巻第十・須達起精舎品第四十一「労度差不如。復作一山。七宝荘厳。泉池樹木。花果茂盛。……。時舎利弗。即便化作金剛力士。以金剛杵。遙用指之。山即破壊。無有遺余。」（4—420中）

d　竜

9　巻第十二「外道又化一竜而有七首。張鱗努目奮悪拏空。尊者化金翅王。従空飛下坐於竜首竜自降伏。」（3—968上）

11　巻第八「外道化為七頭竜王。舎利弗化為大金翅鳥。従空飛下食竜而去。」（24—140下）

12　巻第十・須達起精舎品第四十一「労度差不如。復作一竜身。有十頭。於虚空中。雨種種宝。雷電振地。驚動大衆。……。時舎利弗。便化作一金翅鳥王。擘裂瞰之。」（4—420中）

e　牛

12　巻第十・須達起精舎品第四十一「労度差不如。復作一牛。身体高大。肥壮多力。麤脚利角。跑地大吼。奔突来前。時舎利弗。化作師子王。分裂食之。」（4—420下）

f　鬼

9　巻第十二「時彼外道乃於最後化羅刹身立在衆前。醜悪異常人見恐怖。尊者持呪神力縛之。羅刹苦悩翻生瞋怒。外道驚怖身毛皆立。恐悪自傷発言求救。」（3—968下）

11　巻第八「外道化為起屍鬼。令前害舎利弗。舎利弗以呪呪之。令鬼却廻損害外道。外道怖急下座。五体投地礼舎利弗。」（24—140下）

12　巻第十・須達起精舎品第四十一「労度差不如。復変其身。作夜叉鬼。形体長大。頭上火燃。目赤如血。四牙長利。口自出火。驚躍奔赴。時舎利弗。自化其身。作毘沙門王。夜叉恐怖。即欲退走。四面火起。無有去処。唯舎利弗辺。涼冷無火。即時屈伏。五体投地。求哀脱命。辱心已生。火即還滅。」（4—420下）

（未完）